

## 志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記 大国主命の国譲り」 要約（その8）

松田 武

大国主神となった大穴牟遲神は、国作りに邁進されることとなります。その協力神として始めに登場するのが少名毘古那神（すくなびこなのかみ）であります。少名毘古那神は「神農さん」で親しまれる大阪府中央区道修町（薬屋の街）にあります「少彦名神社」のご祭神のお一柱です。



少彦名神社

少名毘古那神は医薬、温泉、まじない、穀物、酒造など多様な能力を持っておられた、と言われております。もう一柱は中国からやって来られた炎帝神農（えんていしんのう：医薬と農業を司る神）であります。

少名毘古那神は海の彼方から小さなガガイモの実の船に乗って、大国主神のところにやって来られます。

(注)ガガイモ（蘿摩、鏡芋、芫蘭）はキョウチクトウ科のつる性多年草。その実を割ると小舟の形に似ている

## 10. 大国主神の国作り

### (1) 少名毘古那神との出会い

大国主神が葦原の中つ国の国作りを始められて間もないころ、出雲の御大の御前（みほのみさき）に立っておられた時、海の彼方から、小さな神様がやって来られます。その神様は天之羅摩船（あめのかがみぶね＝ガガイモ）に乗って、蛾の皮を剥いで作った服を着ていました。



ガガイモの実の半分

その小さな神様に対して、大国主神が「あなたはどなたですか？」と問いかけました。でも、その神様は答えてくれません。お供の神たちに聞いてもみんな「知りません」と言う返事。（原典：爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知。）

そこに、多邇具久（たにくく＝ヒキガエル）がやって来て、「久延毘古（くえびこ＝一本足の神、かかし）ならきっと知っていますよ」と教えてくれました。そこで、久延毘古を連れて来てもらって、訊いたところ、「そのお方は神産巢日神（かみむすひのかみ）の御子、少名毘古那神ですよ」と答えてくれました。

（注1）：久延毘古＝足は行かねども、盡（ことごと）に天の下の事を知れる神なり、と言われる。（原典：足雖不行、盡知天下之事神也）

（注2）：神産巢日神＝天と地の始めのとき、高天原に天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巢日神（たかみむすひのかみ）とともに現れ出でた神。

そこで、神産巢日の御祖命（みおやのみこと）に少名毘古那神が出雲の国にお出でになられてますよ、と伝えたところ、「このものは我が実の子供です。我が子供の中で、小さ過ぎて我が手の指の間から零れ（こぼれ）落ちた子です。（少名毘古那神対して）あなたはこれから、葦原色許男命と義兄弟になって、この国を作り堅めなさい。」とおっしゃいました。（原典：此者、實我子也。於子之中、自我手俣久岐斯子也。自久下三字以音。故、與汝葦原色許男命、爲兄弟而、作堅其國。）

このようにして、大国主神と少名毘古那は力を合わせて、この国を作り堅められました。ところが、ある日突然、国作り道半ばにして、少名毘古那神は、海の彼方の常世國（とこよのくに）へと渡ってしまわれました。

（注）常世國＝海のはるか彼方にあるとされる理想郷、不老不死の世界。

## （2）大物主神（おおものぬしのかみ）との出会い。

少名毘古那神が居なくなると、大国主神は途方にくれます。やっと国が整ってきたというのに、自分一人ではさらなる国作りは出来そうもない。どの神と私が協力して国作りをすればよいのだろうか、とお悩みになられます。（原典：吾獨何能得作此國、孰神與吾能相作此國耶。）

その時、海上を輝き照らして大国主神のところにやって来られる神がありました。その神がおっしゃるには、「我が御霊を鄭重に祭るならば、私はそなたに協力して、国作りを完成させよう。そうでなければ、国作りは難しいであろう。」（原典：能治我前者、吾能共與相作成。若不然者、國難成。）

そこで、大国主神は「どのようにしてお祭りすればよろしいでしょうか。」と伺いました。そしたら「私を倭（やまと）の青垣の東の山の上に齋き（いつき）清めてお祭りせよ」とお答えありました。（原典：吾者、伊都岐奉于倭之青垣東山上。）

そこで、大国主神はその神を大和の青垣の東の山に鄭重にお祭りしました。これが、御諸山（みもろやま）の山頂に鎮座される大物主神であります。鄭重にお祭りしたお陰で、大国主神はこの国を長く平和に治めることが出来ました。（この2行は想像により筆者追記）

（注1）御諸山＝大和の三輪山

（注2）大物主神＝三輪山の大神（おおみわ）神社のご祭神。実は、古事記には大物主神の御名は記載されていません。しかし、当時の人々は御諸山にまします神は大物主神であると知っていたので、あえて記載しなかったのかもしれませんが。

(続く)

古事記において、大国主神の国作りに関する記述は上記の通りです。古事記の国作りのお話の前の段では、因幡の素ウサギの逸話、大国主神が八十神に攻められ、殺され、生き返り、根の堅州國に逃げ込んだ。しかしそこでも、速須佐男命の課すいくつもの試練が待ち受けるが、その試練を乗り越えた、というまさにドラマチックなお話が展開されています。

しかし、大国主神の国作りについては、二柱の神が協力者として現れた、と言うだけの短いお話になっております。国作りは、山や川など、どこをどのようにされたのか、少名毘古那神はどのような知恵を人々に授けられたのか、大物主神の協力を得てどのような事業を成し遂げられたのか、などについて一切述べられておりません。分かることは二柱の神のご協力があった、ということだけです。

大国主神はかなり広い地域の土木開発、灌漑、米作りなどを指導し、各地の国つ神（支配者）と友好関係を結んでいたと考えられます。旧暦10月のことを日本各地で“神無月（かみなづき）”と呼び、出雲では“神在月（かみありづき）”と呼ぶ。ということは、今風に言えば全国知事会議が旧暦10月に出雲で行われていた、ということでしょう。

ともかく、大国主神の国作りには、二柱の神が協力者として現れた、と記述するだけで、古事記作者の作成意図は述べられた、ということなのでしょう。古事記作者の意図がどこにあったのか、については、国譲りの段で明らかになってまいります。